

第3分科会

全米退職者協会と高齢者の協同



富澤賢治

(一橋大学)

第3分科会の中心テーマ

第3分科会の中心テーマはあらかじめつぎのように設定されていた。

(1) 全米退職者協会(AARP)のパーキンス次期理事長の全体会報告をさらに深めるため、参加者から質問を出していただきながら、アメリカでのAARPの発展の歴史及び現在の活動、さらには将来の展望についてお話を伺い、多面的に参加者が学習と教訓を得るようにすること。

(2) 高齢社会を迎えている現状の中で、高齢者がどのようにして自らの高齢期をより豊かなものとして創り出していけるのか。各地域でのさまざまな実践をもちより、経験を交流し、明日からの活動に生かせる内容として討論を深めたいと思います。昨年からは高齢者が主人公となって「仕事・生きがい・福祉」の充実を求めて高齢者協同組合づくりが全国で本格化しています。典型報告としては高齢者協同組合の活動についての報告と

地元シニアネットワークからの報告をしていただくこと。

午前中は(1)のテーマ、午後は(2)のテーマが取り上げられた。それぞれ(1)のテーマは富澤、(2)のテーマは富田が分担でレポートをまとめた。

全米退職者協会 パーキンス次期理事長報告

パーキンス氏の報告の概要はつぎのようであった。

この分科会での私の報告のテーマは、全米退職者協会がどのようにして高齢者のための就業機会をつくりだしているかということである。

第1に、全米退職者協会は、高齢者の豊かな経験と能力がより多く職場で活かされるように、企業と社会に対する啓蒙活動に取り組んでいる。最近の事例を紹介しよう。全米退職者協会は、高齢者を多く雇用している企業を表彰することによって企業経営者に対する啓蒙活動を行っている。先

司 会 田村 守保 (日本労働者協同組合連合会)

富田 孝好 (日本労働者協同組合連合会)

コメント 富沢 賢治 (一橋大学)

報 告 J.パーキンス (AARP)

安井 雄 (長野県高齢者協同組合)

竹森 鋼 (沖縄県高齢者協同組合)

山口 徳蔵 (神奈川県高齢者協同組合)

河合満喜子 (愛知県高齢者協同組合)

庄子 平弥 (シニアのための市民ネットワーク仙台)

月の授賞式ではニューヨークのバス会社を表彰した。この会社では、従業員が健康の許すかぎり会社に留まるような人事政策がとられているので、50歳以上の人が700人の従業員中の38%を占めている。

また、出版物やビデオを通じて啓蒙活動を行っている。たとえば「ワーキング・エイジ」という高齢者雇用に関するニュースレターを年6回発行し、無料で企業や団体に送付している。

第2に、全米退職者協会は、高齢者の就業機会をふやすために、関連諸機関と協議をして法制度の改善に努めている。また、高齢者の権利に関する豊富な情報を会員、司法当局、法案の立案者などに提供している。

第3に、全米退職者協会は、高齢者就業のために、「高齢者コミュニティサービス雇用計画」(SCSEP)という事業に取り組んでいる。労働省が90%、全米退職者協会が10%を出資しているこの事業は、55歳以上の低所得者に職業訓練のための仕事を提供するものであり、官民協同の優れた実例と評価されている。

報告に関する質疑

報告後の質疑応答でのパーキンス氏の発言は、およそつぎのようであった。

全米退職者協会はアメリカに100万とある民間非営利組織の一つで、理事は全員ボランティアだ。現在の理事会メンバーの平均年齢は76歳。高齢者の健康維持のための活動をしている組織なので、理事たちも健康に気を配り、理事会のときは全員で体操などを行っている。

50歳以上の方が全米退職者協会の会員になることができる。現在50歳以上のアメリカ人の65%が会員になっている。

全米退職者協会が巨大な組織に成長することができた秘訣としては、①種々の情報手段を通じて会員とのコミュニケーションを密にすること、②会員のニーズをよく知り、それに応える活動をする、③ボランティアの協力を積極的に組織すること、④公的セクターおよび企業セクターと効果的に連携すること、をあげることができる。

情報手段としてはつぎのものがある。

①定期刊行物

「モダン・マチュリテイ」(米国最大の発行部数をもつ隔月雑誌)

「全米退職者協会通信」(高齢者関連の法律やニュースを伝える月刊誌)

「全米退職者協会ハイライト」(ボランティアのための隔月ニュース)

「ワーキング・エイジ」(高齢者雇用に関するニュース)

②問題別の各種パンフレット(無料)

③ビデオ、スライドなど。

会員にとっての全米退職者協会の魅力は、健康保険への加入、豊富な情報の提供のほかに、全米退職者協会と提携しているレストランやホテルで割引きを得られることなどがある。

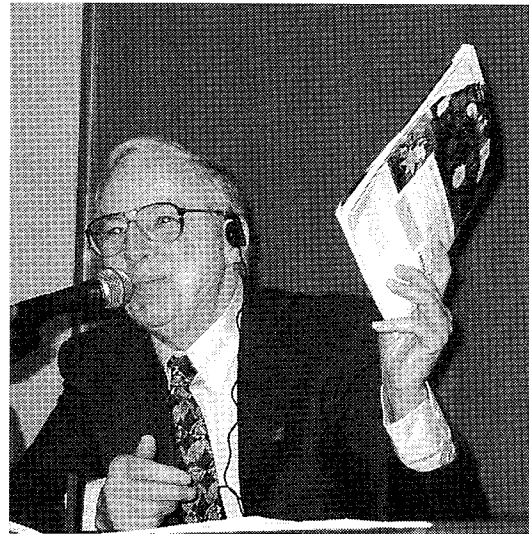
組織発展の今後の見通しについては、50歳以下の「団塊の世代」の人たちの多くが組織嫌いで組織への参加を好まないという点が気になる。

全米退職者協会の発展の要因としてピュリタニズムの宗教的伝統など、アメリカ文化の特異性があるかという問題に関しては、私はとくにないのではないかと考える。アメリカ社会は多文化社会で、いろいろな宗教や思想の人がいる。そのような社会のなかで全米退職者協会は発展してきたのである。

高齢者の仕事おこしの問題に関しては、全米退職者協会は、①法制度の整備のために関連諸機関と協議し、②会員に必要な情報を提供し、③「高齢者コミュニティサービス雇用計画」を通して、高齢者に職業訓練のための仕事を提供している。企業への雇用の斡旋は、リストラ中の企業が多いので、困難な状況だ。

高齢者がいきいきと生活するためには、なによりも高齢者の自発性が大切だ。自発性にもとづいて活動するときに高齢者は活性化する。「助けられるだけでなく、人を助けるようにしよう」が、全米退職者協会のモットーになっているが、ボランティアとして元気に活動している高齢者も多い。

高齢者の健康保険の問題に関しては、保険会社は通常、高齢者の保険加入を好まない。しかし、



多数の人の加入によって保険会社のマーケットシェアが拡大することが見込まれると、別の状況が生じる。全米退職者協会は高齢者の健康保険加入を可能にした点で高く評価されている。

コメンテーターの発言

コメンテーターの富沢賢治(一橋大学教授)は数回にわたりつぎのような発言をした。

「死ぬまで面倒を見合おう。」これはこれまで私が聞いたなかで最も感動的な言葉である。全日自労の人たちが言いはじめ、労働者協同組合の人たちに引き継がれていったものだ。高齢者協同組合は「死ぬまで面倒を見合う」ための具体的な組織だ。問題はこの組織をどのように発展させるかである。

高齢化の問題は日本だけの問題ではない。平均寿命が延びる結果として高齢者の生き方が世界的に問題とされている。国連が1999年を「国際高齢者年」と設定しているのもそのためだ。

高齢者がいきいきと生活できる社会をつくるためには、高齢者を「介護を受ける受動的な存在」とだけ考える従来の発想を転換する必要がある。人のためになにかしたいと考えている高齢者がたくさんいる。その人たちの活力が活かされる必要がある。「助けられるだけでなく、人を助けるよ

うにしよう」というモットーのもとで発展してきた全米退職者協会は先進的な事例だ。日本の高齢者協同組合も同じ理念を持っている。「助け合い」こそ協同組合の基本的な理念だからだ。全米退職者協会も日本の高齢者協同組合も、高齢者の相互扶助組織として、共通の性格をもっている。今後も両者の協力関係を深めて世界的な規模で高齢者の協同を発展させていこう。

日本での運動課題としては、第1に高齢者協同組合が自力をつけて運動を発展させていく必要が

ある。そのためにはまずなによりも高齢者の一人ひとりが運動の主人公だという自覚をたかめなければならぬ。第2に、他の協同組織との連携を拡大強化する必要がある。「非営利・協同の大連合」をつくるという運動方針が重要だ。第3に、高齢者問題の重要性を世論に訴えるとともに問題解決のための国家責任を明確にし、高齢者協同組合運動発展のための社会環境と法制度をつくる必要がある。

富田 孝好

(日本労働者協同組合連合会)

みちのく仙台、冒頭から私事で恐縮ですが仙台という街は私自身が青春を送った私の故郷にあたる街です。高校時代は広瀬川や八木山などを友達と散策をしたり日曜日などは広瀬川の河原で同じクラスの仲間と野球をしたりと楽しい思い出がよみがえってきます。仙台は私が「青春」を謳歌した街です。

さて、この私にとって故郷であり青春の地でもある仙台で「いま『協同』を問う'96全国集会」が開催され、熱い協同への思いと広い交流の輪が作り出され大きな成功をおさめました。私は、第3分科会「全米退職者協会と高齢者の協同」に参加し当日は司会進行を担当しました。

第3分科会は、第1部として今回の集会のひとつの大きなハイライトとなった全米退職者協会(AARP)のパーキンス次期理事長に、1日目の全体集会に引き続き出席をいただき質疑応答を中心しながら、AARPの活動について具体的実践をベースにさらに深めていくことに焦点をあて進めました。(詳細は富沢先生のレポートをお読み下さい。)つまり第1部では、高齢者の活動のモデルとしてアメリカ最大のNPO組織であるAARPの活動を学ぶことが一つのテーマでした。第2部は、日本における高齢者の活動に焦点をあて、特に高齢者協同組合運動がここ1~2

年本格化してきているという状況のもと、高齢者協同組合の実践報告と交流。また、同じ高齢者の活動として地元仙台で大変活発に活動を進めているシニアのための市民ネットワーク仙台の報告など5名の方々の典型報告をまじえ学び交流する中で高齢者の協同を考えるというのが二つ目のテーマでした。

主な参加は日本労働者協同組合連合会・同センター事業団・阪神中高年企業組合・愛知高齢者就業事業団・青森中高年事業団・仙台共同購入会・シニアネットワーク仙台・生活クラブ生協千葉・千葉大学などの方々でした。

高齢者の共同をテーマとして検討された第2部は、5名の方々より典型報告をいただきました。

報告

典型報告の1番目は、「愛知県における高齢者協同組合づくり」として愛知県高齢者協同組合の河合満喜子副理事長にお願いしました。河合さんからは一昨年(9月)15日に設立をした愛知県高齢者協同組合について、なぜ、愛知県高齢者協同組合を設立したのか。設立の取組みを開始するにいたる動機と設立後の運営や資金そして実際の活動について報告をいただきました。愛知県高齢者協同組合は、全国の設立運動で3番目という早い段

階での設立となっています。このことが示しているように愛知県では高齢者協同組づくりは非常に力が入った仲間待ちのぞまれて開始された取り組みでした。そのことは、河合さんが報告の中で語った「高齢者就労事業団の卒業者をひとりぼっちにさせず、生きがいと寄り拠にする『たまり場』づくりだった。」と述べた言葉に象徴的に示されていました。まさに、このことが設立の最大の動機であり思いであったと思います。愛知では、愛知高齢者就労事業団からの財政的支援をあおぎながらも組合員加入・出資増資の取り組みで自己資金を着実に増やしながらか、ホームヘルパー事業・デイサービスセンター「へいわ」の開設・800人をこえる受講者の「らくらく講座」の開講、購買事業の開始など事業と組織の本格的確立に向けて力強く前進していることが報告されました。

典型報告の2番目として、神奈川県高齢者協同組合・理事の山口徳蔵さんより「『指圧健康法』は、み（実＝脳・身＝筋肉）の程チェック、をいたします。」というテーマで報告がありました。山口さんの報告は、ご本人の仕事（指圧師）を最大限に生かして自分と同じように元気な高齢者をたくさんつくりたいとの願いから神奈川県高齢者協同組合で健康づくりの活動を積極的に提案している内容について実技？（健康チェック）を分科会参加者をまじえて楽しく行われました。「生涯現役・立ったまま死ぬ」を追求してそのための脳と筋肉チェックを行うことが大切なこと。そして、健康にかかせないのが脳であるとして脳のチェック方法を会場の参加者に伝授して下さいました。〔皆さん（ ）には何と書きますか。——時は（ ）、人生は（ ）の連続である。故に懸命。——実（脳）の程チェックの第1問です。チャレンジしてみてください。〕

典型報告の3番は、長野県高齢者協同組合・常務理事の安井雄さんより「高齢者の福祉は非営利協同の力で」というテーマで報告をいただきました。

長野県高齢者協同組合は、昨年3月に設立をして信州らしい仕事おこし「農林畜産事業」の展開、21世紀を展望した「健康福祉事業」、連帯から生まれた「物販事業」を3つのコンセプトにしながら佐久総合病院の若月総長を理事長に迎え、多くの団体や個人の方々と協同という2つの文字に示されている理念を大切にしながら一步一步着実に組合員の要求を結びつけ活動を展開してきていること。特に、大岡村での「環境保全・資源リサイクル養鶏事業」のスタートや長野市森林組合との提携などをモデルとしながら信州らしい高齢者協同組合の活動が前進していることが報告されました。

典型報告の4番目は、沖縄県高齢者協同組合・専務理事の竹森鋼さんより「『生活総合産業』事業の形成と仕事おこし」というテーマで報告がありました。

沖縄県は、全国一の長寿県で高齢者の方々が美しい珊瑚に囲まれた海と豊かな自然の中で元気にすごしています。ここ一年は、米軍の少女暴行事件以来「平和」の問題について戦後50年を経過して改めてするどく国民的世論をまきおこし注目もされてきました。

沖縄県高齢者協同組合は、一昨年の9月に全国で2番目の設立県として誕生しました。沖縄では、ホームヘルパーの養成講座を県より指定団体として認定を受け、3級講座を2回・2級講座を1回合計3回開講し75名の方々が修了証を手に入れました。30～40代の女性の受講が多く、修了後に地域での実践活動を希望し今後の活動について期待を寄せています。また、こうしたホームヘルパーの養成を進めながら「在宅総合福祉宅配事業」として、老人給食宅配事業を自治体との提携を模索しながら追求しています。この日の報告では、すでに老人給食センターの建設準備も本格的に進み出し、資金も高齢者協同組合・組合員の出資や増資などを積極的に呼びかけ進んできていること。また、将来方向をキチンと見通す事業計画もたてながらということで各種委員会でも事業計画に

ついて検討を加える活動が進んできている現状が報告されました。

典型報告の5番目、報告者の最後としてシニアのための市民ネットワーク仙台・副会長の庄子平弥さんから報告がありました。

庄子さんは、集会一日目の全体集会リレートークでも発言され元気な高齢者を代表するような内容でこの集会の「もう一人の主役、というような活躍をされた方です。

庄子さんからは、シニアネットワークの活動理念である「奉仕されるのではなく、奉仕する高齢者になる」ことについて改めてシニアネットワークの活動にふれながら報告がされました。報告の一つひとつが私自身も司会を進めながら、本当にすばらしいと感動をもってお聞きしました。

現在、会員600名・会費は月額200円、ニュースを月1回発行して会員に郵送して情報を伝え、スタートをして一年ほどの活動では、デイサービスの取り組み。高齢者に対する食事サービス。ボランティアとして病院での受付の高齢者のお世話（コンピューター操作のわからない高齢者のお手伝い）など多岐にわたり、また、財政づくりではバザーや旅行（洋上セミナー）・米倉齋加年一座の芝居などを企画して大成功していることなどが報告されました。高齢者協同組合の理念である「元気な高齢者がもっと元気に！」がシニアネットワークではみごとに実践されているのではとの思いを強く持ちました。

討論およびまとめ

第3分科会では、以上5名の方々の典型報告を受け、参加者の方々から質問なりご意見をいただくということで残りわずかな時間でしたが交流を進めました。

千葉大学の方からはボランティア活動と其中での男性の活躍について調査・分析を進める中で、改めて高齢者の役割を考えていること。また、仙台共同購入会の方からは、高齢者向けの商品の開発とそのため生協のあり方の検討が必要にな

ってきているのではないかと。生活クラブ千葉の方からは特別養護老人ホームの建設計画を進めながら在宅ケアにも目を向け年間2000時間に達してきている活動と高齢社会への積極的アプローチをどうするのかを考えたいこと。など会場から数名の方にご発言をいただきました。

最後に、コメンテーターの富沢先生に分科会全体のまとめをしていただきました。先生からは、第1に高齢者を支える社会的な仕組みをどのようにつくっていくのか。特に経済領域の中でどのように位置付けるのかという点で協同経済の領域として「公設協営」という考え方があるのではないかと。そしてそのことを追求することが高齢者の協同を考えた時に必要ではないか。第2に、主体の形成を大切にすること。つまり、高齢者が願う社会的活動への思いを高齢者自身の主体性を重んじながら協同の組織をつくっていくこと。そして、その際に一步一步進む過程を尊重し自分自身のものという自覚をつくりあげていく具体的取組みにしていくことが必要ではないか。この2点をポイントにまとめていただき参加者全員で確認しました。

最後に、私自身の感想ですが司会進行の力不足で十分な討論と交流となったかについては非常に責任を感じているところです。パーキンスさんのお話を分科会でさらに詳しく聞くことができたこと。また、シニアネットワークの庄子さんはじめ報告者の方々の日頃の活動に基づく内容豊かな報告に学ばせていただいたこと。また、ひさしぶりにお会いできた仲間もたくさんおり思い出深い集会となったことをふりかえりペンを置かせていただきます。